

第4回 日本伝統芸能のヒロインたち—愛と死のさまざま

女御と老人—及ばぬ恋

能 << 恋重荷 >>

日時：令和 8年 7月 8日(水)10:00~11:50

講師：北見真智子先生（大阪音楽大学講師・音楽学）

場所：茨木クリエイトセンター

能とは…古典的題材を取り上げ、幽玄美を第一とする歌舞劇(中世のミュージカル)

能面、美しい装束、扇を用いて謡(声楽)と囃子(小鼓・大鼓・太鼓・能管(横笛))
にのって舞踊的な所作でストーリーを専用の舞台(能楽堂)で演じられる。

南北時代から室町時代初期にかけて発達、江戸時代中期にほぼ完成

番組構成上の分類は**五番立**になる。

世阿弥のころより後世、<<翁>>に次いで能5番とその間に狂言を演じるのが
正式に五番立となる。

- 初番目物 (神) … よどみなく爽やかに 神霊が多い
寺社の縁起を物語り、天下泰平、五穀豊穡等を祝う
- 二番目物 (男) … きびきびと勇壮に 武士の霊が多い
生前の戦いの罪により修羅道に堕ちた苦しみを描く
- 三番目物 (女) … 優美でしつとりと 美女の霊、草木の霊、老女現実の
美女が多い。
優雅な歌舞を中心に、能の理想美の「幽玄」を描く
(一番の見せどころになる)
- 四番目物 (狂) … 変化を尽くして面白く 女神、狂女、男物狂、地獄の男
唐人、執心物(人間の執着や妄念が死後まで持続し、
その苦悩を描く)
- 五番目物 (鬼) … 手強く足取り早く 女菩薩、鬼、鬼畜、天狗、精霊が多い
鬼神をシテとする曲が多くフィナーレにふさわしく
華やかでテンポが速く豪華絢爛な雰囲気。

能「恋重荷」のスライド鑑賞

身分違いの恋をした老人の物語。
後半は、恐ろしさに満ちた舞台になり
老人の恋の苦しみを描いている。

登場人物

前シテ : 老人(山科荘司)
後シテ : 老人(山科荘司の霊)
ツレ : 白河院の女御
ワキ : 臣下(しんか)
アイ : 従者



山科の荘司(前シテ)という身分の低い老人が白河院の庭で菊の下葉をはいていると院の皇妃である女御(ツレ)の姿を見て恋に陥り仕事も手につかなくなる。女御は、臣下(ワキ)に命じて老人に恋の試練を負わせるために美しい布に覆われた巖(いわお 岩の塊)を持って庭を回れば もう一度女御の姿が見れると言わせる。老人は、持とうとするが持ち上げられない。それもそのはず、中身は巖なのだ。

不可能な試練を与えられ悔しさに老人は、恨みを残して死んでしまう。

老人が死んだ庭に女御が姿を見せると、老人の怨霊(後シテ)が現れ女御を激しく責め立てるが、亡き跡を吊ってくれるなら女御の守り神になろうと言って消え失せる。

終盤 山科の荘司の怨霊(後シテ)の面や扮装のスライドで説明と
能「綾鼓」の説明をうける。

感想: 老人の恋について切ない気持ちと悔しい気持ちの表現が理解できました。13期は能とは【朦朧とした美しさの中に想像をかきたてる何か】と学び理解が難しかったですが、14期は、物語の中に入っの説明とスライド鑑賞で 能の世界に一步ちかづけたかと……